HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第59号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2014-12-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73613
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_59.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第59号

No. 59 December, 2014

【特集1】2014年10大トピック
【特集2】ORCID Outreach Meeting in Tokyo レポート
【特集3】図書館総合展「大学の知の発信システムの構築に向けて」レポート

【特集１】 2014年 10大トピック

(2013年12月～2014年11月)

DRFが選ぶ「2014年(と言っておきながら2013年12月から)のオープンアクセス10大トピック」を発表します。国内の動きを中心に、話題となったキーワードも織り交ぜました。
BOAIから10年、世界的に大きな動きがなかった2014年はどんな年でしたでしょうか!?

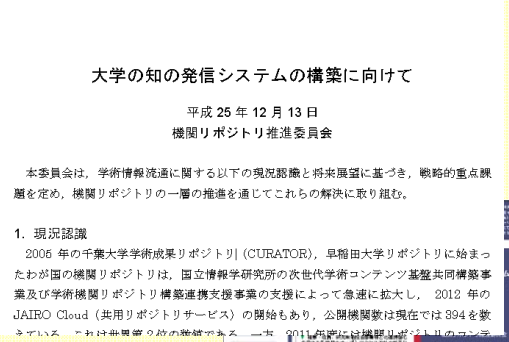
1. 機関リポジトリ推進委員会『竹橋宣言』を発表

(2013年12月13日)

機関リポジトリ推進委員会が発表した『大学の知の発信システムの構築に向けて』。これをベルリン宣言になぞらえて『竹橋宣言』と呼んでいます。今後の日本における機関リポジトリはどのように展開していくのか、学術情報流通に関わるみなさんは目を通しておくべき内容ででしょう。

竹橋宣言はこちら

解説はこちら→ 月刊DRF56号(2014.9)



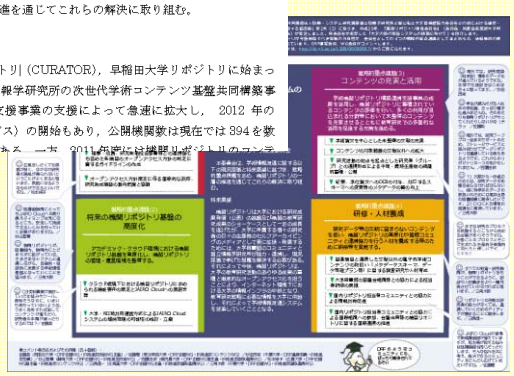
大学の知の発信システムの構築に向けて

平成 25 年 12 月 13 日
機関リポジトリ推進委員会

本委員会は，学術情報流通に関する以下の現況認識と将来展望に基づき，戦略的重点課題を定め，機関リポジトリの一層の推進を通じてこれらの解決に取り組む。

1. 現況認識

2005 年の千葉大学学術成果リポジトリ (CURATOR)，早稲田大学リポジトリに始まったわが国の機関リポジトリは，国立情報学研究所の次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業及び学術機関リポジトリ構築連携支援事業の支援によって急速に拡大し， 2012 年の JAIRO Cloud（共用リポジトリサービス）の開始もあり，公開機関数は現在では 394 を数



月刊DRF 56号の解説

2. 機関リポジトリ推進委員会 各WG始動

(2014年8月1日)

機関リポジトリ推進委員会の下に「コンテンツ」「国際連携」「技術」という３つのワーキンググループができました。各WGの協力員が集い、8月1日にキックオフミーティングが開催されました。今後の彼らの活躍に期待しましょう。

推進委員会のサイトはこちら

キックオフミーティングの報告はこちら→ 月刊DRF56号(2014.9)

3. DRF 図書館総合展でフォーラムを共催

(2014年11月6日)

図書館総合展で毎年フォーラムを開催してきたDRFですが、今年は機関リポジトリ推進委員会と共催でフォーラムを開催しました。トピックキーワードとしても挙げているデータリポジトリについても、一コマを使って情報共有しました。

今号で特集していますのでそちらもご覧ください。

図書館総合展フォーラムのサイトはこちら

4. DRFオンライン勉強会開催
(2014年9月8日～11月)

平成25年度から途絶えていた担当者研修の新たな方法としてオンライン勉強会を開催しました。どこかに集まるのではなく、オンラインだけで(実質的にはメールだけで)議論し、情報共有等を図っていくものです。初めてとなる今年は「博士論文」をテーマに行いました。グループ討議を2度行い、勉強会全体のメーリングリストにて発表、DRFアドバイザのみなさまから講評を頂きました。

この活動については、月刊DRF1月号で詳報します!

5. JAIRO Cloudへ 既構築システムから移行
(2014年5月21日)

NIIのJAIRO Cloudは、当初は機関リポジトリを増やすことを主目的にしていたこともあり、新規構築機関のみを対象としていました。しかし、そのメリットをより多くの機関に広げるため、既構築機関からの移行も可能にしようと実証実験を行っていました。この実験を行っていた筑波大学のつくばリポジトリ(Tulips-R)が5月に無事移行を終えて公開されました。

筑波大学のTulips-R

JAIRO Cloudが気になる方は、月刊DRF57号(2014.10)の特集をご覧ください。

6. 国立国会図書館、電子形態で収集した博士論文を公開
(2014年10月1日)

博士論文の電子公開が義務化されて一年以上経ちます。各大学で公開されているデータは国立国会図書館に集約されていますが、『国立国会図書館デジタルコレクション（博士論文）』で平成25年度以降の電子形態で収集された学位論文が公開されました。今後も随時公開していくとのことです。

プレスリリースはこちら

国立国会図書館
デジタルコレクション
（博士論文）

7. ORCID Outreach Meeting in Tokyo
(2014年11月4日)

著者識別子の世界標準を目指すORCID。このORCIDの国際ミーティングがアジアで初めて開催されました。「誰が」という部分を明確化する著者識別子は、機関リポジトリと密接に関係するもの。これからも注目です。

次のページから詳報していますので、ご覧ください。

8. 機関リポジトリ構築数 日本が世界一！？

10月末の日本のIR公開機関数は489、OPEN DOARでは構築数1位はアメリカで455。必ずしもすべての機関リポジトリがOPEN DOARに登録されているわけではありませんから類推ですが、もしかしたら機関リポジトリ構築数は日本が世界一なのかもしれません。

今年のトピックキーワード

9. データリポジトリ

論文や報告書だけでなく、研究過程の実験や観測などで得た研究データも保存・公開しようという考えがあります。こういった"研究データを公開するリポジトリ"を「データリポジトリ」と言います。

研究成果の再検証や、別観点からの再調査など、生のデータが公開されるメリットは大きいです。とはいえ、データの容量、　バージョン管理、メタデータ記述、管理担当部署など、課題もまだ多いです。

10. APC (article processing charge)

こちらはゴールドOAに関するキーワード。OA誌の出版費用を著者が支払うお金のこと。購読者ではなく著者が支払うという点で，さまざまな立場からのさまざまな思惑が入り乱れているところです。

今後の雑誌購読がどうなっていくのかに関わるキーワードです。要注目。

8月4日のSPARC Japanセミナーでは、この話題を取り上げています。

【特集２】

ORCID Outreach Meeting in Tokyo

ORCID Outreach Meetingが11月4日（火）、国立情報学研究所（NII）で開催されました。 ORCIDはOutreach Meetingと呼ばれる広報的な内容の集会を定期的に世界各地で開催しており、今回はアジア初のmeetingでした。そんなmeetingの内容を神戸大学の内島さんと国際農林水産業研究センターの林さんからレポートしていただきました。

なお，当日の資料はORCIDのサイトで公開されています。ぜひご一読ください。

ORCIDの現状と計画 / なぜORCIDが必要か? 研究コミュニティーの考え方

内島　秀樹（神戸大学）

最初にORCIDのExecutive DirectorであるLaurel L. Haakさんが、ORCIDの現状と今後の開発計画等について、以下のような全体的な説明を行いました。

ORCIDは、各種のIDや組織、システムをIDによって結び付けるものであり、リポジトリ、出版社、助成団体、学術団体、他の著者IDなど多様な組織、システム、プロジェクト間が機械可読形でリンク（plumbing＝配管を提供すると表現していました）されます。従って、ID等を統合するものではありません。ORCIDは発行件数100万に近づいており、メンバー機関は160です。リポジトリシステム関係は11%を占め、また、アジア太平洋地区からの参加割合は15%です。

すでに13万以上の論文がORCID ID付きでCrossRefに提出されており、今年末までには、ORCID Registryに登録される予定です。アジアでの利用例としては、香港大学のScholarly Hub（機関リポジトリ）や中国科学院の著者ページなどがあります。登録は無料であり、30秒で終えることができます。

次にORCIDの必要性について、CrossRefのEd Penzさん、韓国医学雑誌協会のShoon Shil Leeさん、NIIの武田先生の３人から、それぞれの国の実情やCrossRefの事業内容を踏まえてプレゼンが行われました。

興味深かったのは韓国語の氏名はほとんどバリエーションが無く、同姓同名が極めて多いということです。金（キム）や朴（パク）などは韓国語名字のごく一部と思っていましたが、ほとんどの人がこれら数種類の名字に含まれてしまうようです。従って、韓国の学術情報流通（だけではないように感じますが）では、名寄せは必須なのです。

ちなみに、筆者は、金沢大学在職中にCSI委託事業として実施していたリポジトリへの同定識別子の導入実験の関連で、2010年にロンドンで開催されたORCIDのミーティングに参加しました。その時は、よく知られた機関リポジトリ関係者の参加もあり、MIT等でのORCIDの利用について事例紹介も行われ、学術情報流通の基礎技術の運用について熱

ところで、ORCIDとは・・・？

Open Researcher & Contributor IDの略で、研究者に一意の番号（ID）を振ることにより学術情報流通上の同定機能の向上を図ることを目的とした非営利の国際団体じゃ。著名な出版社や学協会、大学等がメンバーとなっており、日本からは、NIIや科学技術振興機構（JST）が機関参加しておるぞ。2012年の秋に運用を開始しており、誰でも自分のプロファイルを登録して、ORCID IDを取得できるのじゃ！

識別子ニュース：JaLC準会員の募集

ジャパンリンクセンター(JaLC)の正会員である国立情報学研究所(NII)は、条件を満たした機関を準会員として取りまとめています。準会員は機関リポジトリのコンテンツにJaLC DOIやCrossRef DOIの登録が行えるようになります。

現在は先行受付機関のみですが、2015年1月に一般募集を開始する予定です。

論文識別子ともいえるDOIを自機関リポジトリのコンテンツに付与するチャンス。皆様の機関でも検討されてはいかがでしょうか。

い議論が交わされていたことを思い出します。今回は出版社、学協会関係者がほとんどで、図書館やリポジトリ関係者はあまり参加がなかったようです。

こうした海外の学術情報関係の集まりにはよくあることですが、企業や学術的な団体がスポンサーシップを提供しています。今回も、スポンサーの一つであるイギリスの研究助成団体、Wellcome Trust が無料コーヒーを提供していました。もちろん、Wellcome TrustはORCIDのメンバー機関の一つです。

ORCIDと研究者ID / ORCID IDの効果的なインテグレーション

林　賢紀（国際農林水産業研究センター）

午後は「ORCIDと研究者ID」「ORCID IDの効果的なインテグレーション」の２つのテーマで６つの報告と議論がなされました。

「ORCIDと研究者ID」では、物質・材料研究機構（NIMS）の秋の新作、ORCID、DOI、SNSを意欲的に取り込んだ次世代研究者総覧システムのプロトタイプ“Ninja”のコンセプトについて谷藤幹子氏（NIMS）より解説とデモが行われたほか、水野充氏（科学技術振興機構）よりresearchmapとORCIDの連携の現状と今後の展開について紹介がありました。また、Choi Seon (Sunny) Heui 氏（Korea Institute of Science and Technology Information (KISTI)）からはKISTIにおけるORCIDを活用した研究者の識別と情報の統合、業績評価への活用について報告がありました。

情報の可搬性を意識した流動性の高い若手研究者へ向けた研究業績のデータソースであるNinja、個人や組織での業績入力のツールであるresearchmap、それらを統合した情報を評価に生かしているKISTIなど、ORCIDの様々な活用事例と応用の可能性の示唆が得られるものでした。ディスカッションでは、登録された情報の信頼性の確保についての取り組みが議論となったほか、発表者の谷藤氏からは「ORCIDは誰のためのサービスかはっきりしない」という趣旨のコメントもありました。自分の研究成果をどこまで整理して外部に見せるか、個人ベースでの情報発信か研究機関としてのアウトリーチのためか、あるいは資金を拠出する者が業績を分析するためなのか、ORCIDは可用性が高い一方、今後持つべき機能についてはさらに検討と整理を行われるのであろうと感じました。

ミーティング、どうだった？

参加者のコメント

ORCIDという世界研究者背番号制が、意外に早いスピードで研究者の日常－論文投稿の場面に登場している。ORCID番号を持っていないと査読で不利益を得るのでは無いか、といった有り得ない不安を呼ぶのも、ORCIDが論文出版と結びついているからである。世界の研究者を同定することによって、公共サービスに発展させようという社会インフラの道、商用ツールとしてのポテンシャルに商機を見いだす道、学会やコミュニティの国際化に活用する先進的な取り組みまで、今、目の前に広がりを見せるORCID－今年の図書館総合展参加者にはどのような光景が見えたのだろうか。公共組織としてのORCIDの将来性を含み、一層に深い関心を持っている。

谷藤　幹子（物質・材料研究機構、JaLC運営委員）

私はホストとして今回のORCID Outreach Meetingが盛況で、とてもうれしく思っております。ORCIDの基本的な仕組みの説明にとどまらず、韓国、台湾、香港における研究者識別子への取り組みを知ることができ、私を含め日本の参加者にとって有意義であったと思います。今後は国内で研究者識別子を含むいろいろな研究に関わる識別子を討議できるとうれしいと思っています。

武田　英明（国立情報学研究所、JaLC委員長、ORCID理事）

ORCIDのメリットは理屈ではわかった。しかし、また新しいアカウント作らなきゃいけないの(うんざり）？というのが正直な感想。私がFacebookもTwitterもやらない大きな理由は、パスワード管理が嫌だからである。最近も、e-RadのIDもパスワードも忘れてしまい、リセットしてもらったばかり。ID/パスワードを覚えなくてもいい夢の認証方法はないものか、、、

栗山　正光（首都大学東京）

「ORCID IDの効果的なインテグレーション」では、自機関や学会でORCIDを「普及する、使ってもらう」ための取り組みについて報告がありました。Chris Chan氏（Hong Kong Baptist University Library）からは、研究成果を見える化するための喫緊の課題である研究者名の同定と研究成果の収集、特に研究者の初期のキャリアからトラッキングできるようにデータの登録を行っていることが報告されました。ここでもデータ収集は課題の一つで、ORCID登録用データのクリーニングや誤りの修正などを行っているとのことでした。Hao-Ren Ke氏（National Taiwan Normal University）からは、教育とアウトリーチのためにORCIDを全学で利用できるIDとして採用、サポートのためサブジェクトライブラリアンへの研修なども行なっているなどの取り組みについて述べられました。登録用のデータ作成には、今後は機関リポジトリやResearchGateとの連携、統合も検討しているそうです。研究者総覧のようなポータルサイトの作成としてVIVOの採用も検討されています。国内からは、近藤康久氏（日本地球惑星科学連合）から発表があり、会員向けサイト「My JpGU」と研究業績を相互に連携させるためORCIDを活用している事例が挙げられました。登録されたデータは相互に同期されるなど利便性は高いものですが、ORCIDの登録はまだ多くなく、今後の広報が必要とのことでした。特にORCIDは科研費IDのようなドメスティックなものではなく、他のサービスとの相互運用性、接続性を重視し国際的な識別子として採用したそうです。

ディスカッションでは普及の度合いや方法について意見交換がなされ、サンプル数は多くないものの准教授未満の研究者や発表が活発な者は利用も高く、年齢層が高くなると理解も低いのではないか、キャリアが浅い研究者には説得の余地がある、などの報告がありました。また、学会とORCIDの関係では、単一の学会のみで活動する研究者だけはなく、多様な活動基盤があり得ることから、現時点では所属する研究者の全てのキャリアをトレースすることは困難だろう、との意見もありました。

今回のOutreach Meetingでは、ORCIDは単に研究者のプロファイルを登録する場としてだけではなく、発表で触れられたような多様な利用ができるサービスであることが示されましたが、その主体である研究者がいかに登録するか、どのようなインセンティブがあるかが問われていると感じました。研究者の業績やこれまでのキャリアがより可視化されることが自身の未来のキャリアにつながるとすれば、それはORCID登録へのインセンティブになりえるとの指摘がディスカッションであったように、評価だけでなく研究者と研究コミュニティの未来につながるORCIDであってほしいと願います。

ORCIDがNPO法人化された2010年から4年を経て、ここ日本において利用促進を目的としたアウトリーチミーティングが開催された。研究環境にまつわるこの手の会議を何度か見てきたが、会場の雰囲気が欧米と日本とではいつも異なる。ORCIDでもやはり同じく異なっていた。欧米では、識別子の必要性と発展性に参加者全員が注力して想像を膨らませる。そういった質疑が飛び交う。日本では、識別子の必要性や発展性に注力する前に、活動への懐疑的な思いが見え隠れする。これは日本と欧米の立ち位置の違いを示すものであろうか。

蔵川　圭（国立情報学研究所）

ORCIDは国際規格ではないがデファクトスタンダードとしてグローバルに相互運用・相互接続が可能、ORCIDは研究業績プロファイルではないがこれをハブにすることで研究者本人にとっても出版者や大学にとっても業績の把握がラクになる、誰でも（研究者ではない私でも）すぐ取得できる、というのが私なりに理解したことです。図書館員的にはORCID、VIAF、ISNI、researchmap を LODでつなげて、というのが著者名典拠の大統一理論になるのかなぁ、と思っています。

小野　亘（一橋大学）

100万件目前のORCID。研究者にとってのメリットが弱いのは変わらずという印象を受けた。ただ、利点がないから増えない、増えないから利点が生まれないというお決まりの議論をいなしつつ、黎明期には黎明期らしく、義務化も含めたあの手この手でとにかく数を増やしていくしかないのだと前向きになれた。グローバルな著者IDが必要とされるシーンは確実にある。時間はかかってもそのうちなんとかなるという気持ちでいよう。

林　豊（九州大学）

※写真提供:内島秀樹

【特集3】

大学の知の発信システムの構築に向けて

―機関リポジトリの新たな可能性を探る

（第16回図書館総合展）

11月2日～8日、第16回図書館総合展がパシフィコ横浜で開かれました。DRFは機関リポジトリ推進委員会と共催で、11月6日にフォーラム「大学の知の発信システムの構築に向けて」を開催し、3部にわたって多様な議論を交わすことができました。この特集では，参加した皆さんからいただいた報告・感想をまとめました。

第1セッション
「大学の知の発信システムを構築する」

宮原柔太郎（日本体育大学）

第1部では、はじめに、加藤信哉氏（筑波大学）から、機関リポジトリ推進委員会の活動報告として、『大学の知の発信システムの構築に向けて』（通称、竹橋宣言）と今年度から活動を開始した3つのWG（コンテンツ、国際連携、技術）について、概要説明が行われました。

次に、国際連携WGの三角太郎氏（千葉大学）から海外会議（Berlin 11、SPARC 2014、OpenAIRE/COAR conference）の参加報告として、英国研究会議（RCUK）やリエージュ大学等のOAポリシーについて、紹介がありました。また、論文だけでなく、研究データも対象として、研究インフラの構築を目指す「研究データ管理」の動向についても紹介が行われました。

続いて、技術WGの佐藤翔氏（同志社大学）から「技術で論文捕捉率を100%にする」と題した報告がありました。研究成果の捕捉率の向上を目指した技術的方策として、現在、WG内で検討を行っている「機関リポジトリとresearchmapの連携」や「文献データの自動収集」といった幅広い取り組みが紹介されました。

また、特別トピックとして、高エネルギー物理学分野のオープンアクセスプロジェクトSCOAP³の進捗状況について、サルヴァトーレ・メレ氏（CERN）から説明がありました。

第1部は、機関リポジトリ推進委員会の活動報告を通して、機関リポジトリの現状と課題、そして機関リポジトリが持つ新たな可能性について考えさせられるセッションでした。

公開機関数、コンテンツ数を順調に伸ばしてきた機関リポジトリですが、今後、「大学の知の発信システム」として活用していくためには、海外の事例等を参考に発展・高度化させていくことが必要になります。同時に、「ガラパゴス化」しないためにも日本の取り組みを国内外に向けて発信していくことが重要だと感じました。

三宅亜弥（広島大学）

第1部では、主に機関リポジトリ推進委員会の概要や各WGでの活動について詳しく話していただきました。私は現在までずっとIRには関わりのない業務をしており、大変申し訳ないのですが、「大学の知の発信システムの構築に向けて」の文章も今回のフォーラムで初めて目を通しました。

IRの世界は委員会で活動されていたりと外部も内部もすごく流動的に動いていて、たくさんの人が関わり活気づいているように感じました。分からないことも多かったですが、IRのこと、機関リポジトリ推進委員会のこと、そしてSCOAP³のことを学び、考えることができました。講師のみなさま、ありがとうございました。

大学の知の発信システムの構築に向けて（第16回図書館総合展）

第2セッション
「研究データへのアプローチ：エジンバラ大学図書館の実践事例を中心に」

新岡美咲（筑波大学）

セッション2「研究データへのアプローチ：エジンバラ大学図書館の実践事例を中心に」では、スチュワート・ルイス氏のエジンバラ大学図書館で行われている研究データ管理(Research Data Management: 以下、RDM)の事例発表「RDM：エジンバラ大学図書館の経験から」を中心に、筑波大学の池内有為氏が「オープンサイエンスを支えるデータライブラリアン」と題してRDMの概要や国際的な動向について紹介し、国立極地研究所の南山泰之氏が「日本における研究データリポジトリへの課題」と題してIRで研究データを扱う際の課題についての調査を発表されました。池内氏・南山氏は、技術やインフラの向上、データ公開による効率化と信頼性の向上、データ公開の義務化、市民科学の拡大といった動向の中で、信頼できる保存先、再利用サービスの必要性、研究支援に長けた人材等という観点から、大学図書館がRDMをする意義を明らかにされました。ルイス氏の所属するエジンバラ大学では、2012年にRDMを始めたとのことでした。RDMシステムには研究前のデータ管理計画、研究中のアクティブデータインフラ、研究後のデータ受託の3ステップがあり、データ受託は図書館が最も得意とする所です。今後の課題は、日本におけるRDM導入は現在のIRで対応可能か、という技術的側面やシステム面と考えられます。

これらの発表の中で印象的だったのは「図書館員にとって最も重要な事は、研究者や大学のIT部門など関連部署との連携」という言葉でした。エジンバラ大学図書館の研究データのほとんどが1MB以下の小さいデータであり、PDF等我々の馴染みのあるフォーマットで保存されている、という事に勇気づけられました。また、イギリスでもAPC・購読料が嵩んでいることやDOI付与について、日本と共通の問題も抱えているようです。日本においてはRDMに関して未だしっかりとした土壌ができておらず、今すぐには導入できないでしょうが、今後の発展に期待したいと思いました。

光森奈美子（海洋研究開発機構）

研究データ管理の基本から始まり、エジンバラ大学の事例、日本での機関リポジトリ推進委員会ワーキンググループの活動と今後の方向性など、大変興味深く拝聴しました。

私の所属機関は大学とは少々事情が異なり、研究データ管理等を担う組織が図書館とは別に存在します。そういった機関において、図書館が研究データとどう関わり、何ができるかということは話題にはなりませんでした。研究データ管理を担当する組織との連携も含め、図書館としての関わり方を、今後考えていきたいと個人的には思っています。

貴重な機会を設けていただき、本当にありがとうございました。

大学の知の発信システムの構築に向けて（第16回図書館総合展）

第3セッション
「リポジトリを、もう一つ先へ：先行事例から学ぶ」

真中孝行（筑波大学）

「リポジトリを，もう一つ先へ ： 先行事例から学ぶ」と題した第3部では、昨年度の日本の機関リポジトリについて5件の報告とディスカッションが行われました。

最初の報告は松本侑子氏（広島大学）の「博士論文インターネット公表の現状と課題：DRF博士論文勉強会開催報告」でした。勉強会は現状と課題を整理し、必要な知識と技術を担当者が習得することが目的です。

正式な最終報告は12月以降DRF-Wikiで公開予定だそうですので期待して待ちたいと思います。

三角太郎氏（千葉大学）の「JAIRO Cloud移行の手引き」ではリポジトリ既構築機関からJAIRO Cloudへの移行実験の報告がありました。

移行作業の注意点だけでなく、移行するシステムとして適当かどうかコスト計算して判断するべきとの主張が印象的でした。

大園岳雄氏（香川大学）の「リポジトリ構築の選択肢」では国内に存在する多様な機関リポジトリの報告がありました。世界でもユニークとされた日本の地域共同リポジトリからJAIRO Cloudによる構築が今後進むかもしれないとの見通しが示されました。

山下大輔氏（西南学院大学）の「機関リポジトリの構築戦略について」では機関リポジトリを新規構築した事例が報告されました。学内横断事業として予算化、プレゼンスの向上、運営労力の分散化等の報告は新鮮でとても参考になりました。

小村愛美氏（神戸大学）の「神戸大学リポジトリ"Kernel"のコンテンツ収集戦略」ではリポジトリ登載コンテンツ別の収集戦略の事例報告がありました。博士論文公表時期の明確化、Gold OA論文の効率的収集、リポジトリ・大学のPRも行う戦略は事例として大いに参考になりました。

小笠原静華（大阪大学）

「第3部　リポジトリを、もう一つ先へ：先行事例から学ぶ」では、現在、図書館が直面している機関リポジトリの課題とこれからについて、5大学の先行事例が発表されました。

近年、リポジトリを取り巻く環境は大きく変化しています。JAIRO Cloudの運用開始、博士論文のインターネット公表の義務化、Gold Open Access Journal の出現と増加。これらにまつわる課題について、なかなか解決の糸口がみつからず、「他の大学ではどうやっているのだろう？」「なにか画期的なアイデアや方法はないだろうか？」と頭を悩ましているリポジトリ担当者も多い事だろうと思います。このセッションは、そんな悩みに解決の糸口を与えてくれる良い機会になりました。

今月「かたつむりとオープンアクセスの日常」は休載です。次回は第61号(2015年2月)に掲載予定。お楽しみに！

次号予告

[特集] JaLC DOI

[連載] 今そこにあるオープンアクセス

読者アンケートにご協力ください。
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkandrf@gmail.com